



俳諧七部集

表乃日

冬乃日
比佐大

一



佛鑑十篇集

五

五

曙らんとしてくろく戸おきあひく
熱田坊こゝしゆさぬ渡一舟といひ
くさやゆいし并ねのこことんて
いとのろかりや重舟がねは
竹牆かきがとちりよとらふわら
のまのまこと牛母花おゆふ

二月十八日

荷兮

まろくちんごの伊勢ま

振らる中馬 ながく連 重五

山子い正月一いぬい鼓いちいく 雨桐

鎧よろいないがいらい火いくいわいや 亭風

志いかいけいまいくいくいやいのい鶴いなく 昌圭

くいもいのい仲いのい岩いもいくいんい 執筆

頃^ワ廣^ア寺^セま^マ行^クの^ノ帷^カ子^シ脱^ク之^ノ重^カ五^カ
を^カね^クく^クふ^クく^ク笛^ヲを^テ戴^クく^ク荷^ク兮^カ
文^ヲ王^ノの^クも^クや^ク一^ヲを^テ土^ヲは^キ也^カ李^凡
雨^ノの^ヲま^シめ^テ角^ノ入^リり^テ草^ヲ一^ヲ両^桐
肌^ニそ^シ一^度ハ^背を^テび^ク世^ヲ荷^兮
頃^城乳^ヲと^ウく^ト晨^ヲ明^ヲ昌^圭
膏^ヲも^シ鏡^ノ人^ノの^影移^リり^テ兩^桐
ワ^クと^ウく^ク神^興う^ク里^ヲ重^五

鳥^居り^テ半^道真^ノの^砂行^ク昌^圭
花^ヲも^シ長^男ノ^帛爲^ワぶ^カら^ニ李^凡
柳^ノ下^ニ陰^ヲが^ラら^ニ鞠^ヲも^シ也^カ重^五
入^リく^ク日^ヲ一^ヲ蝶^ヲい^キり^テ荷^兮
二^ニひ^クく^ク來^ルか^ク家^ノ連^ヲ李^凡
う^ノ不^懷く^ク梓^ヲき^ク也^カ雨^桐
黒^髪を^テた^ガも^シ也^カ荷^兮
い^クも^シく^ク五^位ノ^針也^カ昌^圭

松乃木くわいの司つかさどの門かどのくまのま
 ぐりあその跡あともえぬのむぞ
 朝朗あさらう豆腐とうふを煮によるまのまけり
 念佛ねんぶつのおきたに杯さかづきをいれ也
 穂ほ夢む生なの蔵くらを信まの信むりて
 家名いへなを揚あの名なよるまの月つき
 傘かさの田い也なり竹たけふたの雨あめの昏くらよ
 釣つり鮎あゆかぶくおあかくく
 兩りゆう相さう 重じゆう五ご 昌しやう圭けい 荷か兮ぎ 李り虎こ

荷か兮ぎ
 昌しやう圭けい
 兩りゆう相さう
 重じゆう五ご
 昌しやう圭けい
 李り虎こ
 中ちゆう心しんも兄あにとままのりりのりりゆゆ

三月廿日 四水亭

且蒙

あつ坂や畑の山に
おもしろうもむし
まはらば草花は
口をぐくま清うな
はらばたきれぬ
賞のうらまは出さ

野味 荷子 越人 羽生 執事

ウ

望むこと素多しとあり

野水

兼わは垣よよみんそと

具葉

表町由はそと之髪利ん

越人

曉いし車ゆくそと

荷弓

鯨負しく大津入浪よなり

具葉

何ゆきしんあ国入声

越人

詠長あはぬむとと蚊や

羽足

花よたきん百日の

野水

里人薄を籠と練入西

越人

月かき浪よ重石とく揚

羽足

去りしはよ来入浪よ新入船

野水

汎るよ春浪傷入山

具葉

のよもや菟葉の被伊勢女

越人

心侍のそと代女眉入園

荷弓

物も入軍の中ハ行りきよ

羽足

名もから粟とちく尸とけ

野水

久年^{るびすだ}の念佛とありて^た暮酒棚
 ちかぢや無^む裁^がよりん階^{とみり}や
 けりおみあふ入^くるあ^くは拘^こ犯^ふ人
 乞^せ乞^せ廿日とやと^せ来^き多^た粉^{こな}
 一^い束^たの宿^{しゆく}を馬^{うま}より寺^{てら}おれ也
 こゝ魂^{たま}ま^まつゝ^つら^らき^きる^る月
 陽^{やう}炎^{えん}の^のあ^あか^かる^るま^ま婦^ふん
 毛^け兩^{りゆう}袖^{そで}より^{より}の^の哥^かい^いき^きく^く
 景^{けい} 越^こ人^{にん} 且^{かつ}藁^{わら} 四^し水^{すい} 羽^う足^{そく} 荷^か兮^や 越^こ人^{にん} 且^{かつ}藁^{わら} 四^し水^{すい} 羽^う足^{そく} 荷^か兮^や

田^たと^とお^おく^くは^は心^{こころ}あ^あま^まの^のま^まり^り
 カ^かの^のゆ^ゆめ^めを^をは^はぶ^ぶく^く中^{ちゆう}る^る子^こ
 健^{けん}や^やと^と井^いの^のあ^ある^るれ^れは^はか^から^らの^のゆ^ゆ
 う^うび^びく^くの^のあ^あら^ら雪^{ゆき}の^のあ^あら^らく^く
 入^いつ^つも^もと^とら^ら廿^{にじゅう}九^く日^{にち}の^の月^{げつ}さ^さむ^むし^し
 毛^けの^のけ^けら^らき^きり^り氷^{こおり}の^のし^しめ^め
 羽^う足^{そく} 荷^か兮^や 越^こ人^{にん} 且^{かつ}藁^{わら} 四^し水^{すい} 羽^う足^{そく} 荷^か兮^や

三月十日 且藁々田家子

とてまゝ

里秋

蛙のこまきゆへに

額ひびよりかきこる

且藁

巖いざなの鼻が宿り

越人

まじく人をきか

荷分

走くのは渡りの舟

冬文

芦あしの穂ほを招まねく傘かさの端はし

執筆

ウイソ
磯まが子施 飢鬼の僧の集く

且藁

岩乃あひしも蔵し申る里

里水

雨の目も瓶焼やし煙ふ

荷兮

いごあきするも旅の一はし

越人

尋しつ 坊まの住まば寝中て

里水

解ふまきし杖むしり松

冬文

今宵の更しとてやいば

月十九日 荷兮室了ん

嘆息の菊はかりし白露が

越人

秋のあめよりか 頌

且葉

初し 浅色よりけり火を打ぬ

冬文

別わかの月よとてあつらふ

荷兮

枕あしぞあ花四の宮より唐輪と

且藁

二
長しゆく道のほろよじけり

里水

永まき見たりとけりよとて

荷兮

貴たかのよ 年としとて五月の中

越人

紹鷗せうおうり飄フズ々フズりりて木きのこく
四水

連つらな舟ふねのあしつらなあしのあしじ
冬文

瀧たき臺たいく柴しば押おしままて音ねここに
契人

岩いわ苔かぶのわ巻まきよよここぎぎももも
豊業

じじりりりりのし事ことままききららりり世よのな中なかを
冬文

送むす二ふた枚まいももむむろろきき家い毫ほ毫ほに
契人

朝あさ毎まいのあ露るああれれにに夢ゆめ化はららぬ
豊業

暮くれううららをを送むすぶぶききああくくのの月つき
四水

ほほののろろとと煙けむりのの月つき毎まいにに網あみ入いる
音字

多おほく羽うのの漂たれれおおどどりり多おほくひひりり
冬文

ああままれれおおどどろろぬぬ気きよよららぬぬ
四水

ほほろろくく一ひとのの掌てのひらのの名なありあり
音字

糸いとのの水みづ汲ひてて壺ひょう起たりり
契人

解とと食たけけいいくくよよ君きみのの代しろ
豊業

山やまと所ところののううほほ遊あそぶぶ子こはは
冬文

いいくくままきき産うむむのの舟ふね
荷字

追加

三月十九日舟泉亭

越人

山吹入あがらふ畑そいのまじき

蝶まふはくくすあのなまらく

ささららおおやや餅もち酒さけををきき雪ゆき

行い幸しあ入いくくららしし洗あふふ玉たま器が

翔た口くちをを鷹たかのの鍛か治ちののいいくく

月つきののままののいいくくああをを

舟泉

聽雪

蝨盤

荷兮

執筆

上

春

昌隆ミチノリのねんをぬ御代のま

利重

元日の本ねるはけい馬足あしし

重五

初はつまの遠里牛うしれりふ日か

昌圭

くくししねね海をうみががらら麥あわ穂ほ

桐

門かどまま松まつ芍薬しやくやく園のぞの雪ゆきととむむし

舟泉

鯉こいの香水かうすいか入い周しゅうくく栲こ白はくし

羽衣

舟ふねくくのの小こ松まつとと香かけけ糸いとヶヶり

且藁

曙の人顔 牡丹 赤くはきか
 腰 次元日 里乃 睡り 人
 星 小紅 肩乃 牛乃 夢
 朝日 二分 柳乃 動く 白ひく 人
 之の 中乃 赤ひく き 雲乃 赤
 芥 搦 二 けく 風乃 き 歌 小
 の 心乃 行 人 心

社園
 犀夕
 香霞
 聴雪
 前分
 同
 且業

みく とき 白 雲 心 赤 人
 古地 乃 蛙 色 心 赤 人
 傘 張 乃 睡 り 胡 蝶 乃 赤 人
 山 乃 花 枝 根 乃 赤 人
 花 乃 心 乃 赤 人
 春 野 吟
 足 跡 乃 探 乃 曲 乃 蒼 乃 人
 林 寺 乃 心 乃 赤 人

越人
 芭蕉
 重土
 龜洞
 越人
 杜園
 若凡

榎 ^木 ^を 採 ^り 運 ^び ぬ ^る 荷 ^手

餓 ^別

藤 ^乃 花 ^き ^り 山 ^さ 越 ^人

山 ^畑 ^乃 菜 ^つ ^き ^り 重 ^五

蚊 ^い ^り ^よ ^ち ^り ^よ ^ち ^り 同

ま ^の ^穴

夏

か ^き ^ん ^の ^山 ^鳥 ^尾 ^は ^長 ^し 九 ^白

郭 ^公 ^と ^油 ^乃 焼 ^く ^る 鹿 ^小

か ^つ ^り ^き ^板 ^金 ^の ^背 ^戸 ^の ^一 ^里 越 ^人

う ^き ^り ^き ^り ^き ^り ^き ^り 杜 ^國

み ^竹 ^乃 ^き ^り ^き ^り ^き ^り 龜 ^洞

傘 ^を ^き ^り ^き ^り ^き ^り 舟 ^泉

武 ^藏 ^坊 ^を ^き ^り ^き ^り

か ^き ^り ^き ^り ^き ^り ^き ^り 高 ^露

か ^き ^り ^き ^り ^き ^り ^き ^り

馬くまふくし〜りる有 聽雪

老聃曰知足之足常一足

つゝふは難水あつゝさ葉屋哉 越人

等一本の微雨こほきて鳴蚊か 柳雨

ほくまらるるあつゝ中さ昏り 塵文

萱草の酒ふるさ花の色 荷兮

蓮池のよ〜り〜り 全

曉のまほさなほ遅き〜り 昌業

夏川の音よ病〜り 重五

譬喻品三界無常猶如火宅

と〜り〜り

夕月の汗ぬ〜り 越人

秋

宵戸の細〜り 且稟

負家の〜り

玉のま〜り 越人

了きくまこ一層入る夜も
雨桐

きわく人をやとひつ月人
芭蕉

山寺くまはけかこ月夜
超人

凡く家も西も秋の月
翠水

八鴻をかきり屏風の繪
全

具足とく顔のく月と舟
全

侍志

そぬぬをたききくく人出る
荷兮

閑居増戀

秋ひらり琴柱くづもく雀ぬ後
荷兮

鈴鳥くまをく一人よみく
舟泉

又

馬とぬと牛ハク白村とこれ
杜園

芭蕉翁を帯く物とく

中おきく子孫を子牧屋を忌と
大垣住 如行

雪のく舞の子おあん
昌碧

蕉

芭蕉

馬をくながしお雪のちりぬ

芭蕉

行燈の燐もどきささるる

越人

芭蕉をさうりてうらな

このはら氷をいほぬらん

杜園

隠士よからかたふと

あさりきき家ひりて

荷兮

貞享三丙子年仲秋下浣

冬

笠をかき逢のふくむらうの成衣に
 もゆわく農あらしに正平なり
 徒はうたふと人まじく可なり
 おほくはらむの^{おほく}相争はた
 國^{くに}のふくむらうのふくむらう

出づる^{いづる}

ねむ^{ねむ}こが^{こが}く^く女身を行ふ^をゆ^ゆく^く

芭蕉

中^{ちゆう}も^も也^やと^とり^り。家^{いへ}の^の心^{こころ}茶^{ちや}花^{はな} 野水

有^あり^りの^の心^{こころ}水^{みづ}く^く酒^{さけ}を^をつ^つく^くと^とも^もく^く 荷^にか^か

う^うら^られ^れを^をも^もる^るふ^ふあ^あの^の心^{こころ}く^く 重^{おも}五^ご

朝鮮^{しんせん}の^のほ^ほそ^そり^り ^はら^られ^れあ^あの^の心^{こころ}く^く 杜^と國^{こく}

日^ひは^はち^ちあ^あく^く ^に野^のく^く ^を茶^{ちや}を^を煎^{せん} 正平

わのふれとを後をたおしのほつらめく野水
後をたおしのほつらめく野水
つらつらのつらつと乳を志おめえ 雲又
こえめつらつとつらつとたあく 荷
乳法カゲホウのあつたつらつと火と焼く 芭蕉
あつたつらつとつらつとつらつと虚家カライエ 杜因
田中つらつとつらつとつらつとつらつとつらつと
吾勝つとつらつとつらつとつらつとつらつと 野水

あつたつらつとつらつとつらつとつらつとつらつと 杜因
あつたつらつとつらつとつらつとつらつとつらつと 野水
二の尾このえつとつらつとつらつとつらつとつらつと 野水
襟をこつらつとつらつとつらつとつらつとつらつと 芭蕉
のりおめ蕉あつたつとつらつとつらつとつらつとつらつと 芭蕉
い中を恨うらみつらつとつらつとつらつとつらつとつらつと 芭蕉
ぬす人の記念の松れ咲おねく 芭蕉
あつたつらつとつらつとつらつとつらつとつらつと 水 社 必

水社必

芭蕉

望ぬ風そ無程あそぬく心何ゆ荷
冬ゆくはらばらしくふしや唐ア 菅 ア 野水
志らくと砕けくそ人の骨ハ 何 杜國
鳥賊イ 多るその國此カ ころの 事又
あふれや此謎マ こそとら一都么 野水
秋水一斗ニ 一むあつても夜そ 芭蕉
日赤の赤子白う坊く自ら成てて 重宝
中く不槿なこころ心琵琶抄 荷

うしの夜ウ ともあつぬるれ夕と秋と 芭蕉
算ミ 一算の奥をい軍と 一算 キ 村金
わいのつとあなをい星シ 孕しく 荷
さふさふいれまのこころいしや 野水
綾ア ぬく花湯と志望の花濂ニ て 杜國
廊下と藤フ ののけりさあや 芭蕉

あつちの壮年
まじりまじりまじり振原

塾水

まじりまじりまじりまじり

まじりまじりまじりまじり 食 杜國

まじりまじりまじりまじり 芭蕉

まじりまじりまじりまじり 荷弓

まじりまじりまじりまじり 重五

まじりまじりまじりまじり 正平

るる^甲の深き河原の田原わらへて 杜國
奥のさけはくまの飛只なまをたかく 禁水
床もろくく^と渡すく^わをたまる男 荷子
涙さ^{えん}ゆきけ^ら此恨この^うわらへり
口ちと^い痛^いを^らち^りさる^る地^ちの^ちを^らか^よす^水
明日を^あら^るく^る筆^筆に^くぐ^く送^送わ^りを^くき^き
か^か三^三ち^ちち^ちく^く盃^盃を^らあ^らな^なく^く死^死意^意
月^月を^らく^くの^の杜^杜母^母 ぬ^ぬく^く杜^杜國^國

魂^みの^のが^がわ^わぶ^ぶ北^北習^習居^居く^く 草^草
あ^あの^のく^くわ^わの^の地^地蔵^蔵の^の所^所 荷^荷
物^物を^をら^ら母^母の^の娘^娘の^の心^心の^のち^ちに^に 杜^杜國^國
ふ^ふ路^路い^いら^らぬ^ぬを^をら^らの^のハ ゆ^ゆ家^家の^のあ^あ
櫛^くく^くに^に餌^餌を^をら^らゆ^ゆの^のあ^あの^のあ^あの^のあ^あ
く^くら^らの^のあ^あの^のあ^あの^のあ^あの^のあ^あの^のあ^あ
藤^ふの^のく^く荷^荷を^をら^らの^のあ^あの^のあ^あの^のあ^あ
三^三線^線が^がく^く不^不破^破の^のせ^せい^い 人^人 ち^ちは^は

巻の目

六

るすうら^{こち}実徳^ひて打ら^ちる基^ちと^いふ道^い義
祢^ねと^いふく^のの^さく^さ 七十^{しち}杜^と國^{こく}
奉^{ほう}かめ^め次^じの^の事^{こと}を^いふ^らめ^めの^の入^い 志^し文^{ぶん}
ふ^ふの^の傘^{かさ}に^に下^か衣^いあ^あと^とに^に 志^し
蓮^{れん}池^いと^と踏^ふむ^の子^こ遊^{あそ}ぶ^は夕^{ゆふ}中^{ちゆう}の^の 杜^と國^{こく}
ま^まど^どに^にま^まつ^つの^の 蔭^{かげ}様^{やう}を^をも^もと^と 志^し
月^{つき}と^とま^まと^とる^る唐^{から}物^{もの}の^の 髪^{かみ}に^に 志^し
志^しと^とめ^めの^の 臨^{りん}濟^{さい}も^もま^まの^の 志^し

秋^{あき}柳^{りゆう}を^をん^ん虚^こく^くな^なる^るこ^こと^と 志^し
芳^ふの^の實^{じつ}つ^つふ^ふと^と 志^し
後^{あと}より^{より} 祝^{いわ}を^をひ^ひら^らふ^ふの^の 志^し
花^{はな}と^とあ^あを^を典^{てん}侍^しの^の 局^{きょく}の^の 内^{うち} 志^し
こ^この^の 花^{はな} 鸚^{ひん} 鷓^し 尾^びの^の 志^し
一^{いち}の^の 志^し

秋

七

つえをひく事僅く
中歩

海へ英をひく月とわらふす露の家 杜國

こわりの崎をひく水のひかすく 重五

菫原の露をひく初狩人かたきく 野水

山の門をひくあまかたきく 芭蕉

馬糞搔あふらん風のちかすく 荷弓

茶花湯者おしむ時への露をひく 正平

新しきけと物も娘うへつとさき
燈籠もつとさきとさきとさき
つゆ秋のすゆふかお撰せんに水あき蕉
蕎麥とく青く一滋シ賀カラキ糸のつゆ水
物月夜双ふららの様おとく杜玉
おとく買カフみららにほとくおとくさく
おとくおとくのわとくおとくおとくおとく
おとくおとくのわとくおとくおとくおとく

おとくおとくのわとくおとくおとくおとく
おとくおとくのわとくおとくおとくおとく
おとくおとくのわとくおとくおとくおとく
おとくおとくのわとくおとくおとくおとく
おとくおとくのわとくおとくおとくおとく
おとくおとくのわとくおとくおとくおとく
おとくおとくのわとくおとくおとくおとく
おとくおとくのわとくおとくおとくおとく
おとくおとくのわとくおとくおとくおとく
おとくおとくのわとくおとくおとくおとく

新しき

新しき

捨すてしふるを柴舟長タケくのみつるは 時水
晦日ミツカとよむひく刀賣ヤり年一トシま
雪ユキの祀マツル呉コ孤コ國クニの笠カサをつりりま 荷ネ
襟えりくく雄オスの片袖ひたもとをとくく 七ナナ連レン
あらし人とた持もたぬ 棺ひつぎと吞のむと 五イ又
芥子カイシのなくく名ナととるは禪ぜん 杜玉トク
三ミ月ツキの車を暗く後の後 蕉セウ
好コト湖ウミのはくく琴コトとと 者もの妙タカあ

豆マメ五イ日ニチのなめううてとどとと放はなす 杜國トク
洋ヨウよら本ホ念ネン佛ブツ教キョウをなめつる 荷ネ
あけあすすききの燈をあくくに起徒たく 野水ノミ
あらしのなくくもも夜ヨのなの帯をしり 七ナナ又
六ロクのな飛トビたすくあらたたのなくく入イ荷ネ
このなくくあらたたのなくくあらたたのなくく

冬

廿

なふ波はくあ〜火燧^{カキ}を
とく^{とく}なま^{なま}とく^{とく}

重五

炭賣^{すす}れ^れもの^{もの}の^のす^すま^まこ^こを^を黒^{くろ}の^の免^{めん}
ひ^ひと^とほ^ほの^の轡^{しん}花^{はな}を^を鏡^{かがみ} 磨^{とぎ} 寒^{さむ} 荷^に兮^や
花^{はな}蘇^す馬^ば骨^{こつ}の^の手^てお^おり^りく^く咲^さま^まの^の社^{しゃ}國^{こく}
鶴^{つる}り^りる^るま^まを^を此^{こゝ}月^{つき}り^りす^すの^の草^{くさ}葉^は
の^の所^{ところ}吹^ふぬ^ぬ秋^{あき}の^の日^ひ瓶^{びん}に^に酒^{さけ}を^をさ^さす^す白^{しろ}
羽^は織^おる^るの^のさ^さな^な市^{いち}に^に振^ふり^りて^てる^る 羽^は笠^{かさ}
野^の水^{みづ} 芭^ば蕉^{じょう} 杜^と國^{こく}

賀茂川や胡磨千代家の徽とて 荷
いそぐらの尊なる山一りおとる 重
ねふとも布操哥りくわりし 野水
うねるをささちちを越る三平 杜國
於らけくくわらるる鴛鴦離 羽笠
火とぬ火燧おそくとりん 芭蕉
門守の翁に家子ころく寝 芭蕉
血刀くは月月の傍に 芭蕉

旁りて本御の務せし 杜國
あゆまら納豆おそくくなら 芭蕉
とんかく泣橋の徽とよそに守り 芭蕉
僧まのいそ次敷冬衣 春 羽笠
白燕帰るぬ水くおと洗は 芭蕉
宣言がくこく釵と飾は 芭蕉
八十年と三つ分の童母りて 芭蕉
かぐらそらそら七文のすく 杜國

ANCI

上

田家眺望

雲月や鶴カウのイ々ツクあゝいゝわて 荷カウ

冬フユ此ココ船フネ日ヒ々々あゝいゝわて 芭蕉

檜ヒノキ山ヤマの体ていをを不ふれれ茶チャ湯ユ 重五

此ココ茶チャどどろろししれれ塩しほととおおれれつ 杜國

音ネ之ノ如ごとく具ぐ足そくく月つきののううすすぐ 羽笠

酌しやくももろろ童どう茶チャ糸イト切キり 埜水

秋のころ猿ねの連歌いよりのしき
佛くもれ帝一居士のゆる寺 待方
寐として椿れたの落る音 社國
茶く系遊花のゆる風の香 寺又
雉追に烏帽子れ女又三十 時水
庭より木芳化るころの落る夜 羽堂
おのめよよ山橋くはらうらん 荷方
麻のつとよ奇の集 ぬむ 世業

江とをく獨系菴と世成捨く 飛又
家月出く身をまかあうり 杜國
おのの衣帯より落る花と 羽堂
籠輿ゆる波木瓦のふあは 野水
骨をたえくゆるく 羽堂
乞食は養とともふ志の先 待方
泥のくは屋とく鯉を捨る 杜玉
所幸く進むみよる 寺又

ふにてもう幸此小角豆の花けり
萱かや屋やまのうに炭團たどんはく白羽はく豆
芥子かひあまの坊まぢう交まのく打うたれが荷かり
おれくくすのみきくく蓮れんは實じつさ葉え
志しのうまうく飯い量りやうのく月げつのおま
落おちとくくうの風かぜやうのくま杜と園えん
釣つり椅いの屋や根ねのれきくう片ぺん底てい西せい望ぼう
豆腐とうふつりて母ははきん喪もり入い那な水みづ

之これ改かへる草くさ此こゝ後あとを破やぶぬへく
伏ふり木き幡ばんの落おちる水みづをく
つらゆき男おとこ猫ねこいふ所ところ捨すてて杜と園えん
芥かひのまらすれ雪ゆきをくくまふ雪ゆき又また
水みづ干かわと秀ひらるの聖ひじりわやうく雪ゆき水みづ
山茶花さんぢあな白しろふ笠かされこりりく雪ゆき

冬の日

追加

楯

江のくろくもさる雨しとる山散
 樽火しあつるあはれらの松造り
 下志に焚きとやけんと
 檜まじくまを屋のしと船あ 社園
 報し蛤かりし月色 海 芭蕉
 ひらりし橋をよりの岐阜山 禁水

江南名珠碩家いひことを道子これ
 是も將をもの酒を命なりむ志
 あはれ或を大樽又造るまは江湖をわ
 礼中いづるゆへに毎も異あり其あ
 後なる恵子ありて用ること河し
 江つりくおほねとちあは寝るあや
 ありてけらちる臨る醒てさる
 日月陽秋さるるの氷て雪あけ

わ乃園ちり郭公も、つらたると歌。
かき吾知人ともんえさあつて。皆風雅
乃藻思をいつら。志しきと是らいつれら
やころあしして乾坤の外なる正を也
花のよきを云く毎日け内よをとり入。

元禄三六月

越智 越人

花見

翁

木影さゆまけも鶴毛揃の柳
西日乃とつにささるる気りり
遊人乃風あさしりま言さく
ささとも習さぬ冬刀於鞞ヒキタス
月待く假所内裏の司名
粉白つくる松うさやわさ
水 碩 翁 曲水 珍碩

鞍置る三歳約よ秋のまて
 夕暮さまのくー 霞の雨
 へ迎に沓務乃涌湯は夕暮る
 中も珠のれるた山伏
 舟の事を唯一まえ居しり
 かねきおのるまゝほりり
 物おもふもの吟のそら
 月乃に親乃親たこと露
 翁 水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁

秋風ちり船をこるる波の音
 馬ゆくくや 白子あ松
 小歌懐花乃盆は一舟田
 巡礼死ぬるののをるふ
 何のまは標の現であらる
 又去却のゆい人あさ
 四羅ろり成いそるたがち
 熊野みと見と泣あひり
 翁 水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁

手束たつうき紀き新しん念ねん守しゅのの頑がんも
 酒さけででままけけたた新しんああはは海かい魚ぎょ食じき
 ぬぬ六む乃の目めををののそそくくままてて善ぜんののり
 假かりれれ持ぢ佛ぶつよよむむ子こ念ねん仏ぶつ
 中ちゆうくくよよ土つち間まはは新しんああはは新しん念ねん守しゅ
 一いつ函くわん名なをを置おけけるる新しんああはは新しん念ねん守しゅ
 将しやう新しんくくいいぬぬ酒さけ乃のおおをを食じき
 月つき一いつ夜やくくよよ明あ後ごるる月つき
 水 頑 翁 水 頑 翁 水 頑

花はな落らくああままののままののひひとと枯かと
 唯ただ四し方はうりりるる草くさ庵あん外がい新しんああはは
 一いつ貫くわん此こ錢せんじじののややままののりり
 醫い者しや乃のくくままののままのの飲のぬぬ分ぶんをを食じき
 花はな咲さけけるる苦く野やああままのの欠け欠け
 蛇へびくくままののままのの山さん中ちゆう
 水 翁 水 頑 翁 水 頑

翁 十二
 珍頑 十二

曲水十二

いろく乃々もむうーやまのそ

珎碩

くされて様ちう差はさあぬ

翁

蝙蝠乃のやまつをさうあて

路通

かろ籠乃とをぬかす

今

は家蘇の突をいふすに今らるる音

碩

親子あらしく月あたらふ

今

詩

五

秋のさ宮もろを、色移たぬひたあ
こせく〜れて、こ〜〜女おとめ侍しやく
ふり香乃母藏くいを首くいひきささ
小六せうくわく〜〜市いちちかたは
鮎あや釣乃ちいさ〜思ゆる川の端
念ねん佛ぶつよしてたのむ〜のこ
〜〜らら送くわい菜さいも〜
店てん酔よ〜里乃大だいままたれたれされ
全 碩 全 通 全 碩 全 通

娘むすめ母はは雅みやびと人乃ひと姫ひめつれ〜通
にき〜あひよ月つきのの影かげ夜よ全
志し不ふのさ守まも塚づかのの下したをを和わ白しろりり 碩
生い鯛たうあ〜？ 浦うらちうままゆ 全
け村むらの〜度どさふふ醫い者しやくちちららああるるりり 荷に兮
おろろんをけい〜そのままりりととふ 藝
か〜〜さるる母はは退たい席せきももせせららるる 兮
あ〜あ法ほふちち酒しゆ乃の法ほふちちととふ 人

な、みある疾乃り力とぞいひき
蕎麦ま白くり 山中 胴中
うやんぐり 墨乃りつれの月夜
まきくもつ子のこころ裸出
免つり ぬきも喜こととちとち
文珠の智も思も 殺持の思癡
ふれ如成ふふと 味いひり不味
何ともさぬよとある 物棚
人 与 人 与 人 与 人 与

志乃小夜のたううありて
まふふとる 顔を見ぬあし
汗の香をかえそ衣とせし
志きくこれ雨たうちあり
い花ゆりり又百人ち 膳
すまの接どもたもたるる接
今 今 今 人 今 今 今

跡九
一

活通八

岩与十

越人八

城下

野徑

鉄炮乃遠音に昇る卯月とら
 砂の小ま乃瘦なせてひたりし
 西凡なる守町の小貝拾ひたりて
 なまぬる一川モラ鯛モラひひらひら
 暮いさくし人志しるるしるしる
 秋の菖蒲し花はををりり

里東

泥土

乙州

怒誰

弥碩

夕陽花の細手に杖をたてて ほそけ 筆
 目の中へ杖をくえ客がらある やり 野徑
 夕小も又川を舟をさくはへ あ 里東
 顔乃杖の——生つこい あ 泥土
 馬は石部を渡さうや あ 乙洲
 一里を杖つと 山乃下 あ 怒誰
 足知まきて 空を定由 あ 泥土
 杖れをへ 雨 あ 里東

雪舟は高城の梅女の客をた あ 野徑
 き歩に つあく 丁百ち あ 乙洲
 月花はさるをよくと あ 珍碩
 若夫はあし乃塩 あ 怒誰
 くらねまは あ 里東
 中 あ 珍碩
 乃みた あ 乙洲
 古 あ 野徑

時くを百姓まゝと為帽字
 配亦まじりて供御乃蛤
 多やかき入船出買先位やん
 連も力も皆と成りたり
 か凡乃大罽寺繩を喰
 喪乃こゝろに用叶へり
 糊剛とて世もあつた
 夕迎歩り月も暮食喫も守

怒誰
 泥土
 珠碩
 野徑
 里東
 乙刈
 泥土
 怒誰

看經乃嘸と海と一嘆氣勢
 四十を老まるとか
 髪を世に梳乃流を産ま
 醉を細多よあけと吹
 牧村乃花ハ多葉も
 田より片隅み苗乃少り

里東
 珠碩
 乙刈
 野徑
 怒誰
 泥土

野徑六
 里東六

泥土六
 乙卯六
 怒誰六
 珠碩五
 筆一

雜

龜乃甲^ま烹^まく^まく^ま付^ま鳴^ま也^ま
 唯^ま牛^ま糞^まを^ま何^ま乃^まく^まく^ま也^ま
 百姓乃^ま木^ま綿^まは^まま^まの^まま^まて^ま
 小^ま号^まを^まく^まく^まゆ^まか^まく^まく^まの^ま繩^ま
 獨^ま疾^まく^ま奥^ま乃^ま同^まひ^まる^ま旅^まの^ま舟^ま
 蜻^ま蛉^ま 爲^まて^まま^まゆ^まる^ま也^ま

乙卯

珠碩
 三東
 探志
 昌房
 正秀

秋萩乃清前よりちの増え荒
 風長れが滅乃志乃の成り
 常乃まきまを勢乃て修部
 常乃やうあるかますこの塵
 初花は雛の事指不指なり
 人のそこよと意そあらまらる
 此後乃香に吹そとあひ一箇の
 寂もたに起そはよハ鳥啼

及肩 野池 二嘯 乙所 探志 里東

秋入乃ゆき乃く月より
 まこ上京をえゆるやとむ
 蓋は蓋鳥羽の町をけ今年ま
 雀ををりよ 籠乃ぞく地を
 うす世のる日おんみらととておれお池
 袴のいぢや〜ゆ声のむのぬれ
 深く夏本綿給の給すく
 撰 何まをれとてまのけの

正秀 及肩 野徑 二嘯 乙所 珍碩 里東 探志

暗くらかりまよまよ茶ちや籠かご乃の下したををまままま小こ
樽つづみをを呼よぶぶるる家いへままののりり口くち
いいままららままのの酒さけ一ひと筋すぢにに獲とれれ
るる波なみかかゆるゆる鯉こい棚たな乃の秋あき
ははくくくく切き糸いとのの孫ひなはは凡たふし常とこ
をを加か乃の序しよもも不ふのの水みづ月つき
冷ひやああまま味あじののつつくくをを妹あね川がはにに
標すゑ挿さすするる水みづ次つぎもも亦またかかららるる
昌房
正秀
及肩
野徑
二嘯
乙刈
珠碩
里東

肉にくををめめつつつつ尻しり毛けののううををななららままああけけ
ここいいままををかかくくここううれれとと侍さむらい
ななららままのの身み減へりりてて細こいいににははけけ
縄なまををああままるる寺てら廿にとと次つぎ
花はな乃の比ひ屋やのの目め待まちままるるささるるここままでで
ささららままののねねのの柳やなぎ子こののままををんん
昌房
平秀
及肩
野徑
二嘯

乙刈 四
珠碩 全

三

里東四
探志全
昌房全
正秀全
及肩全
野徑全
二嘯全

田野

^{あせ} 晴道や苗代時乃角大師 ^{たごい}
^{あせ} 晴道や苗代時乃角大師 ^{たごい}
めきとろまあむ野一氣乃顔 ^{かほ} 珠碩
は浦ふとのわやえん鳴 ^{なまき} 一まの穴 全
かまゑたろ一ま門口乃文字 ^{もど} 秀
月歌又利休乃家を白鼻 ^{うけ} 全
度 ^{たひ} 一芽 ^{いも} をま ^あ 碩

虫を皆つて獲くはつるやうも
片足くの本獲くはつる
誓文を百もふりておるはつる
おのゝこゝろり侍はつる
酒のあつたおふ自由なるはつる
瓶乃ておるはつるやうも
月氷る解きおるの銀河
骨理おるはつるはつる
碩秀 碩秀 碩秀 碩秀 碩秀 碩秀

了ぬおのゝ大脇指はつる
獨ある子もはつるはつる
江戸酒を花はつるはつる
あい乃山弾はつるはつる
雲雀啼里をはつるはつる
火を吹くはつるはつる
本堂ハあるはつるはつる
羅綾おるはつるはつる
秀 碩 秀 碩 全 秀 碩 秀

齒を痛人乃髪を梳る由
 落のちこころむすくさし瘦る
 藤垣乃窓の紙端を挟む
 口上果ぬいよささうお付
 多小ゆりよ小判を於る華袴
 秋入御る肥後あり隈本
 幾り後も留て月見る後衣
 寸布子いさうお金をやり
 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩

深山元めくや吃らしく
 呼あまらやも猫を御す
 子親法小人所乃雨あらし
 や一海の楓木の芽萌立
 菱花は雪路拂つるきあり
 水雪一なる場にさゆき
 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩

正秀 十九
 跡碩 十七

8000

